松山の病院開発ひざ用装具
仏メーカーと技術提携

メディカルえひめ

済生会松山病院（松山市山西町、岡田武志院長）が開発した変形性ひざ関節症用の装具が、フランスの大手義肢装具メーカーと技術提携し、二年後をめどにヨーロッパでも実用化される見通しになった。

この装具は二〇〇二年、同病院の山崎準平リハビリ科長と本窪義親医療福祉機器開発室長らが開発。ひざ上とひざ下の装具をつなぐジョイント部分がスライドするのが特長で、ひざのひねりなど三次元の動きにも対応できることから、立ち上がったり、歩いたりする時などの痛みを軽減できる。継続的に使うことで、ひざ関節の筋肉を正常な動きに近づけ、O脚の矯正などのリハビリ効果も期待できるという。

山崎科長は「従来の装具は、曲げる、伸ばすという単純な動きしかなかったため、痛みが十分取れず、使用を断念し、結果的に手術を受ける患者が多かった」と話し、「この装具はゴルフなど趣味のスポーツでも無理なく使え、患者の閉じこもり防止にも役立つ」と説明する。

すでに国内では三千―四千人の患者が使っているという。日本のほか、アメリカ、イギリスなどで特許を取得しており、現在、フランスやスウェーデンなど欧州四カ国で特許出願中。

同病院は継続的に開発を進めており、金属製だったジョイント部分の素材にカーボン樹脂を使うなど、軽量化にも成功。筋力が弱った高齢者も無理なく使えるという。

技術提携を申し入れたのは、義足や装具、福祉機器などを扱うフランスの総合メーカー「プロテオール」で、欧州各国に約四十カ所の営業拠点を持つ。二十四、二十五日に同社のプロダクトマネジャーと技術部長が同病院を訪れ、山崎科長らから実物を使いながら説明を受けた。

今後、両者が共同開発を進め、フランス国内で臨床試験を行う予定。同病院の首藤貴リハビリセンター長は「世界的メーカーと技術交換することで、よりよい装具が患者に提供できる」と期待している。

プロテオール社の担当者に、変形性ひざ関節症用の装具の説明をする済生会松山病院の山崎科長（左端）＝24日、松山市山西町

変形性ひざ関節症

加齢や肥満などでひざの関節に負担がかかり、クッションの役割を果たす軟骨がすり減るなど、歩行時などに痛みが生じる病気。特に中高年に多く、厚生労働省の調査では、治療が必要な患者は全国で700万人以上とされる。初期の場合は装具などで関節への負担を軽くできるが、重症になると人工関節に入れ替える手術が必要になるケースもある。装具は医師の診察に基づき処方され、保険適用される。